まえがき

今日，日本で暮らすということは，キャラクタ【注 1】に囲まれることを意味する。街にはハローキティやポケモンなどのキャラクタ商品があふれ，地域や企業で活躍する「ゆるキャラ」と呼ばれるマスコットの数は，下火になったとはいえ，それでも千を超えるという【注 2】。

複雑で奥深い現実の人間と比べると，それらのキャラクタたちは多かれ少なかれ単純で扁平（flat）【注 3】な存在である。だが，人々が他者を，そして自分自身をも，それらのキャラクタのように単純な存在と見なしたがることは，実は珍しくない。その場合，キャラクタという概念は，人間のあり方に関わってくる。たとえば「学校ではあんなキャラ，バイト先ではこんなキャラ」という，電子掲示板に書き込まれた（自称）若者の告白は，まさに人間のあり方を語っている。そして，この「キャラ（クタ）」は，なぜか英語 “character” には訳せない。

キャラクタを切り口に，人間とことばのあり方を論じてみたい――そんな思いから，三省堂のホームページ上で連載「日本語社会 のぞきキャラくり」を始めて（定延 2008-2010），10 年余りになる。その間，いろいろなことがあった。

連載は 100 回で完結し，それをまとめた同名の著書が出版されたが（定延 2011a），それが複数の大学の入試問題に出題されたことは今でも記憶に新しい。特に，拙著の冒頭部が外国人留学生用の入試に出たと聞いた時は，「オレと結婚しろニャロメ！」や「ウソだよぴょーん」がわからないがために人生が狂ってしまった受験者がいたのではないかと後から気を揉んだが，とにもかくにも，著書のおかげでさまざまな「出会い」が生まれたのは嬉しいことだった。

出版の 1 年後，「補遺」と称して再開されたネット連載の中でも（定延 2012-2015），リアルタイムで報告してきたように，筆者のキャラクタ論を国内外で，時には学問分野の垣根を越えて話せたことは（例：定延 2011b; 2013，Sadanobu 2015）大きな収穫になった。ボルドーモンテーニュ大学，リュブリャーナ大学での対話を通して，よりにもよって機能主義言語学という予想外の領域から，アンドレイ・ベケシュ（Andrej Bekeš）氏という強力な理解者を得たことは大きな喜びであり，（少なくともヨーロッパの）機能主義言語学の懐の深さを筆者は思い知ることになった。言語学者だけでなく，社会学者の瀬沼文彰氏・野澤俊介氏とも共働して，学会でキャラクタをテーマとするワークショップやパネルセッションを開き【注 4】，論文集を編集できたのも【注 5】，これらの出会いのおかげである。

それらの活動の中で，筆者のキャラクタ論も前著の段階から少しずつ広がり，深まってきた。進展の内容は，「補遺」の連載に一部は反映させたが，「補遺」は 2015 年末に 101 回で終了しており，多くは公表できていない。そうした進展をすべてまとめたのがこの本である。もっとも，前著を読まれていない読者にも無理無く理解できるよう，必要と思える箇所は前著との重複をおそれず，但し手短に述べてある。

人間とことばのあり方に対する読者の興味を，この本が少しでもかき立てることができれば，これ以上の幸せはない。

著者

【注】

1：末尾に棒引き「ー」を付けた「キャラクター」という表記がより一般的だが（スルダノビッチ 2018：47），この本では，筆者がこれまで採用してきた表記を踏襲し，棒引き「ー」を付けず「キャラクタ」と表記する。但し，引用やそれに近い箇所では原典の表記を踏襲する。

2：全国の「ゆるキャラ」の人気を競うイベント「ゆるキャラグランプリ」の公式ウェブサイトによれば，2017 年のグランプリにエントリーした「ゆるキャラ」は 1157 体（「ご当地ゆるキャラ」が 681 体，「企業ゆるキャラ」が 476 体）で

ある（http://www.yurugp.jp/about/，最終確認：2018 年 5 月 5 日）。「ゆるキャラ」については第 2 章を見られたい。

３：フォースターは，扁平な登場人物，つまり一文で語り尽くせるイメージでできており，生身の人間のような感情や感覚を持たず，状況を問わず常に変わらない登場人物が（そうではない “round” な登場人物と同様に）小説には必要と述べている（Forster 1927: 103-118）。また，リュティは，昔話の登場人物は扁平，つまり実質的に傷つき痛む心身を持たず，環境そして時間から切り離されていると述べている（Lüthi 1947, 1981[7]: 訳 33-60）。ここでの「扁平」（flat）は，これら 2 つの「扁平」を区別せず，漠然と指している。

４：(1) ヨーロッパ日本語教師会マドリードシンポジウム，パネルセッション「キャラクタと電子資料を駆使した日本語教育の新展開」2013 年 9 月 6 日，コンプルテンセ大学, (2) 日本語文法学会第 16 回大会, パネルセッション「日本語とキャラ」2015 年 11 月 15 日，学習院女子大学，(3) 日本語学会 2016 年度春季大会，ワークショップ「キャラ・役割語をめぐる問題とその検討」2016 年 10 月 30 日，山形大学，(4) 国際語用論学会第 15 回大会，パネルセッション Japanese-born “characters” meet European and American insights.2017 年 7 月 19 日，Belfast Waterfront.

５：(1) *Acta Linguistica Asiatica* Vol. 5, No. 2, 2015, https://revije.ff.uni-lj.si/ala/issue/view/322, (2) 定延利之（編）『「キャラ」概念の広がりと深まりに向けて』東京：三省堂，2018.

序章

この本は，コミュニケーションにおける人間の姿を，前著（定延 2011）に引き続き「キャラ（クタ）」【注 1】を切り口に，しかし前著を超える視野と深さで論じようとするものである。

導入部にあたるこの序章は，全部で 5 つの節から構成されている。第 1 節では，この本の背景となる筆者の問題意識が紹介される。第 2 節ではこの本の目的が，第 3 節では考察対象が，そして第 4 節では用いる手法が紹介される。最後の第 5 節では，この本の構成が述べられる。

第 1 節に進む前に，この本の中で特に重要な位置を占めることになる「意図」という概念を，一緒に持ち出されることのある概念「目的」と共に，ここで念のため紹介しておきたい。

この本で言う「意図」「目的」は，日本語社会【注 2】の日常会話に現れる日常語「意図」「目的」と大きく異なるものではない。だが，違いもある。

日常会話では，例外的なことではあるが，意図と目的は人間以外の存在（たとえば法人や遺伝子）にも認められる場合がある。だが，この本では，こうした場合を扱わず，意図と目的は人間にしか認めない。

この本での「意図」「目的」と日常語「意図」「目的」とのさらなる違いとしては，「意識」との関係が挙げられる。いや，これはむしろ，この本における「意識」という語の方が，日常語「意識」と完全に同じではないと述べるべきかもしれない。日常会話では，たとえば「意図的にぶつかる」と「意識的にぶつかる」がほぼ同義であり，また「意図してぶつかる」と「意識してぶつかる」がほぼ同義であるように，「一的」や「一して～する」の形では「意識」は「意図」と紛らわしくなる。だが，この本では「意識的に」「意識して～する」という表現は採らず，「意識」は常に「意図」そして「目的」とは別物として区別される。

但し，このような意図と意識の区別は，あくまで大まかなものに過ぎない。人間の行動の微細な分析に立ち入り，たとえば「調査対象の指先が 1 秒のうちにどのような軌跡を描いたか」といったレベルで観察すれば，指先の動きのどこまでが「意図されており」，どこからが「意識されているだけで意図されてはいない」のか，意図と意識の境界線がどう引けるのかが判然としなくなる領域が広がっているということは認めておきたい【注 3】。

そして，この本で言う「目的」とは，「実現しようと意図され目指される事柄」のような概念を指す点では日常語「目的」と同じであって，哲学的な用語ではない。雨や金属疲労といった，意図の無い現象には，この本の「目的」は想定されない。

では，問題意識から述べていこう。

第 1 節　問題意識

この本の背景となる筆者の問題意識は，前著（定延 2011）以来のもので，それはひとことで言えば「コミュニケーションにおける人間とは，どのようなものなのか？」というものである。

この問題に対して，前著で出した解答は，「人間とは，コミュニケーションの状況（たとえば対話相手が誰か）に応じて変わり得るものだ。意図的な演技・偽装とは別に，人間の一部分，つまり一般の日本語母語話者たちが最近「キャラ」と呼んでいる部分が，思わず変わってしまうということがあり得るのだ」というものである。

当たり前ではないか，と読者は思われるかもしれない。だが，本当にそうだろうか？　我々は「人間は変わらない」という考えにどっぷり浸っていないだろうか？　「変わっているのは，コミュニケーションの状況に応じて，人間が行動のスタイルを切り替えているだけ」で，「人間自

体は変わらない」と思いがちなのではないだろうか？

日常生活においても，そして，事実を直視するはずの研究においても，「人間は変わらない」という人間観に，人間は昔も今も，強く縛られている。そのため，変わりたくても，なかなか変われないし，変わってしまっても，それを認めるわけにはいかない。ここに人間の不自由さがあり，コミュニケーションの難しさがある――前著ではこのようなことを，ひたすら具体例を繰り出すことで，読者に思い当たってもらおうとした。

このような前著での解答を，この本は変えようとはしていない。だが，前著にあったさまざまな限界を改善し，より幅広い視野から，より明確で，より豊かで，より奥深い解答をめざしている。次の第2節ではこれを順に説明する。

第2節　目的

まず，「より幅広い視野」について。前著では，コミュニケーションにおける人間の行動に集中し，それ以外のものは，ほとんど視野の外に置かれていた。この本では，たとえば化粧や古美術の古色付けといった，コミュニケーションの現場から離れたところでの人間の行動（いわば，コミュニケーションに向かう人間の行動）をも視野に含める。

次に，「より明確」ということについて。前著では最終章で断ったように，「キャラクタ」あるいは「キャラ」に関する先行研究には，ほとんど言及できなかった。それは，先行研究における「キャラクタ」「キャラ」の用語法が若干込み入った状況にあり，生半可な言及はかえって読者を混乱させるばかりと判断したためである。「キャラクタ」の定義は論者間で一致していない上に，「キャラクタ」とは別の概念として「キャラ」（Kyara）を導入する立場もあり，さらにその「キャラ」に対する別の論者たちの理解もさまざまである。この本では，さまざまな「キャラクタ」論・「キャラ」論のうち，上述した筆者の問題意識と特に近い関係にあると思えるものを整理・紹介することにより，筆者の立場をより明確なものにしたい。

さらに，「より豊か」ということについて。前著では，人間のあり方を考える上で特にことばに注目し，キャラ（クタ）とことばの結びつきを取り上げた。この点はこの本も同様である。だが前著では，その取り上げ方は決して十分なものではなかった。実質的に取り上げることができたのは，ことばを話す人間のキャラクタ（「発話キャラクタ」）と，そのことば（「役割語」，金水 2003）だけであった。この本では，「話す――話される」という結びつき以外の，キャラ（クタ）とことばの結びつきにも簡単ながら観察の光を当てる。

最後に「より奥深い」ということについて。「人間は基本的に変わらないものだ」という伝統的な人間観について，前著では最終章でごく簡単な紹介に留まった。この本では，この伝統的な人間観の不当性をより詳しく明らかにしたい。また同時に，不当であるにもかかわらず，人間が伝統的な人間観をどのように必要としているかということも詳しく論じたい。

第3節　考察対象

この本は考察対象を，現代日本語社会の人々の，言語を中心とした行動に限定する。現代日本語社会という限定は，筆者が注目している「人間の変化」を示すデータが，現代日本語社会には比較的容易に見つかる一方で，他言語社会にはその対応物がなかなか見当たらないという事情による。たとえば，電子掲示板に見られる匿名の現代日本語話者の書き込み「自分はバイト先と学校でキャラが違う」は，他言語話者には理解されにくく，この「キャラ」は（この本のような長い説明を付けなければ）英語 “character” にならない。

この意味での「キャラ」という語は，20 世紀末頃から日本語社会に

流通し始めたものらしいが（第1章第3節を参照），語ができる前から現象自体はあったという可能性は否定できないので，考察対象は20世紀末以降に限定せず，現代の日本語社会の人々の言動としておく。

現代日本語にはさまざまな方言が存在する。この本はそれらの方言を考察対象から排除しないが，考察対象は基本的に現代日本語社会の「共通語」とする。ここで言う「共通語」とは，塩田（2018：9）が「特定の地域を連想させるようなアクセントやイントネーション（つまり「方言的なもの」）が用いられていても，それで会話が成立していれば，共通語に含まれます」と紹介している，広義の共通語にあたる。

「共通語」という語にこれほどまでに広い意味を持たせることは，塩田（同）でも指摘されているように，必ずしも一般的なものではない。だが，方言と相互排他的な関係にない広義の「共通語」に目を向けることは，特に「キャラ」に光を当てようとするこの本にとって，必須の措置と言える。コミュニケーション研究の文脈で述べたことと一部重なるが（定延2016b：第2章第3節），方言を排除しない理由を2点，説明しておく。

方言を排除しない第1の理由は，「共通語」というものが，どのように狭くとろうとも，《外来者》（よそ者）【注4】のことばを必ず含むものである以上，共通語と方言は少なくとも外面からは峻別しきれない，ということである。

まず，「共通語が《外来者》のことばを含む」ということについて，読者の理解を助けると思える例として，《平安貴族》と《宇宙人》のことばを挙げて説明しておく。

現代では，ドラマやマンガに登場したり会話に持ち出されたりする《平安貴族》は，「～でおじゃる」と話す。だが，金水（2003：184）・金水編（2014a：41-44）に述べられているように，「おじゃる」は室町時代末から江戸時代初期にかけての京都の庶民のことばであって，現実の平安貴族は「～でおじゃる」などとは話していなかった。このことが示

しているのは，現代において《平安貴族》という人物イメージが話すことばは，平安時代における貴族のことばとは食い違っており，両者は別物だということである。現代における人物イメージ《平安貴族》の「～でおじゃる」は，平安時代のことばではなく，あくまで現代のことばとして位置づける必要がある。「共通語が《外来者》のことばを含む」とは，以上のような意味である（なお，このように，必ずしも現実と一致するとは限らない人物像，つまり人物イメージこそ，この本で中心となる「キャラクタ」にほかならない。この本ではこれを《平安貴族》のように二重山括弧でくくって記している）。

「共通語が《外来者》のことばを含む」ということは，「ワレワレハ，ウチュウジンダ」などと平坦なイントネーションで話す《宇宙人》の場合，さらにはっきりする。《平安貴族》のことばは，いま述べたように厳密なものではないにせよ「借用元」らしきもの（平安時代の貴族のことば）に思い当たれるが，《宇宙人》のことばは，現時点で宇宙人も宇宙人語も発見されていない以上，思い当たれる「借用元」らしきものが無い。《宇宙人》の平坦なイントネーションは，宇宙人語から借用したものなどではなく，明らかに現代日本語（共通語）の一部である。

これらとほぼ同じことが方言についても言える。現代日本語共通語の社会で《地方人》が話す方言は，あくまで現代日本語共通語における方言と位置づけなければならない【注5】。たとえば「方言ブーム」のただ中にある若者が，九州方言の「ちかっぱ」（とても）と東北方言の「めんこい」（かわいい）を合わせて「ちかっぱめんこい」（とてもかわいい）と言うような「ことばの新しいハイブリッド」（三宅2011）は，現代日本語共通語の一部である。

次に，「共通語と方言は少なくとも外面からは峻別しきれない」ということについて説明する。共通語と方言の区別は，会話する2人が或る瞬間には医者と患者として会話しており，また別の瞬間には幼なじみとして会話しており，さらに別の瞬間には地域住民どうしとして会話して

いるといった，会話の中で変動し得る話し手の帰属意識・アイデンティティ（social identity，Ochs 1993 他）とも関係しており，外部からは判断しきれない。たとえば大阪方言話者が発した「なんでやねん！」は，それが大阪人としての「素」の発話であるとすれば方言だが，ここは少しユーモラスに《大阪人》らしさを出して言ってみようと，アクセサリーを着脱するように，自身の生育地方言をきもちに応じて部分的に出した「アクセサリー化された方言」（小林 2004）あるいは「方言コスプレ」（田中ゆかり 2011）であったとすれば，それは現代日本語共通語における《大阪人》という一種の《地方人》のことばである。どちらになるかは，外部からの観察で判断できないことがある。それどころか，話し手本人にとっても完全には明らかでない場合もあるだろう。

この本が方言を排除しない第 2 の理由は，いま述べたこととも重なるが，相手の方言に思わず釣り込まれたり，逆に妙に反発するように別の方言が我知らず口を衝いて出たりといった，日本語コミュニケーションを生きる話者たちの帰属意識を巡る微妙な情緒，機微，同朋意識，共感，そして小競り合いや暗闘に，筆者は寄り添っていたいからである。この本の中でそれらを詳述することはできないが，この本で示すことになる，コミュニケーションや言語の観察を通した人間研究は，それらを排除せず，むしろ積極的に目を向ける方向性を持っている。読者の理解を助ける例として，ここで，谷崎潤一郎の小説『細雪（ささめゆき）』（1944-1948）における，蒔岡幸子（まきおかさちこ）の話しぶりを取り上げてみよう。

蒔岡幸子は大阪市内の裕福な家庭に生まれ育った大阪方言話者であり，いまは大阪からほど近い芦屋に暮らしている。

幸子の友人の一人に，丹生（にふ）夫人という女性がいる。これまでのつき合いは長いが，丹生夫人は一貫して，おっとりした人物であった。

ところが或る日，丹生夫人は一変する。眼の使い方，唇の曲げ方，煙草を吸う時の人差指と中指の持って行きようまで，何だか人柄が急に悪くなったようだと，同席している幸子は感じてしまう（『細雪』上巻，1944）。丹生夫人は一体どうしてしまったのか？

実は，今日の丹生夫人は，同席している相良という「何から何までパリパリの東京流の奥さん」につき合っているのか，東京方言をしゃべっているのである。

幸子にしても，阪神間の奥さん達のうちでは，いっぱし東京方言が使える人，で通っている。だが，丹生夫人は，やはり大阪人ではあるが女学校時代を東京で過ごし，東京人とのつき合いが多いだけあって，完璧な東京方言を早口でまくし立て，幸子は「まるで別の人のようで，打ち解ける気になれない」。「何か東京弁と云うものが浅ましいもののように感じられて来て」「しゃべるのを聞いていると苛々（いらいら）して来て」，とまである。

この事例が示しているのは，ことばは単なるメディア（媒体）ではないということである【注 6】。コンテンツ（内容）が伝わるなら，東京方言でしゃべろうが大阪方言でしゃべろうがどちらでもいい，というわけには大抵いかない。話の内容というよりも，話す人間が前面に感じられるような，きもちの出たコミュニケーションの場合，ことばの切り替わりは人間の切り替わりである。丹生夫人が東京方言でしゃべるか，それとも本来の大阪方言でしゃべるかは，夫人の「人柄」に関わる問題，「まるで別の人のよう」になってしまうかどうかの問題，つまり，この本のテーマである「キャラ（クタ）」の問題である。

丹生夫人が発動する《東京人》キャラは，『細雪』の舞台となった昭和初期の阪神地域，それも「芦屋」では，特に攻撃的で品が無く見えたのかもしれない。多くの人たちが出るところへ出れば大阪方言ではなく共通語をしゃべる，あるいはしゃべろうとする現在の阪神地域では，東京方言をしゃべったからといって，ここまでの受けとめられ方は――微妙な局面もありそうだが――普通はされないだろう。半世紀余りのうち

に阪神地域で生じたこの変化の背景にはもちろん，東京方言を母体とした共通語の阪神地域への浸透があり，それに伴う大阪方言の地位低下がある。だが，ここで問題にしたいのは，それとは別のことである。

今日，丹生夫人がことさらに東京方言で通しているのは，一緒に会話している相良という「何から何までパリパリの東京流の奥さん」につき合っていると思えるふしがあるという。このように，我々は会話相手のことばにつられ，引きずられるということがある。

実際，幸子自身にしても，後日，再び東京方言をまくし立てる丹生夫人と話していて，「いくらか東京弁に釣り込まれ」てしゃべるという場面がある（『細雪』下巻，1947-1948）。幸子という人間は元来，洪水騒ぎの折とはいえ，隣りに住んでいるシュトルツ夫人というドイツ人に，

「（あなたの娘さんの学校は無事だと聞いた。）あなた安心ですね」

「（あなたの妹さんの安否がわからないそうだが）あなたの心配，わたし分ります。わたし，あなたに同情します」

などとカタコト日本語で言われ，その都度，

「ありがとございます」

と，「う」の無いカタコト日本語で答えてしまうほど，釣り込まれやすい人間でもある（『細雪』中巻，1947）。

だが，相良夫人を交えた問題の会話では，幸子は東京方言に釣り込まれていない。むしろ「こう云う夫人の前へ出ると，何となく気が引けて，――と云うよりは，何か東京弁と云うものが浅ましいように感じられて来て，故意に使うのを差控えたくなり，却って土地の言葉を出すようにした。」とある。

このような，相手と違った方向に行こうとする動きを，磁石のＮ極どうし，あるいはＳ極どうしが反発して離れ合う様子にたとえて「反発」と呼んでおく。「反発」は，磁石のＮ極とＳ極が引き合うように相手と同じ方向に行こうとする「釣り込まれ」を拒もうとする動きである。なごやかな談笑のうちにも，幸子は相良夫人に釣り込まれている丹生夫人を下品に，そして２人の東京方言を浅ましく感じ，自分はそうなるまいと反発する。このような「戦い」に寄り添わずして，言語コミュニケーションの観察を通した人間の研究が成り立つとは筆者には思えない【注 7】。

この本が考察対象として方言を排除しないという措置についての説明は以上である。

他方，考察対象を基本的に共通語とした措置は，我々の研究の現状と関わっている。キャラ（クタ）に関して，次の第４節で紹介するような先端的な実験科学的アプローチが可能であるとはいえ，我々はキャラ（クタ）研究はもとよりコミュニケーション研究の未だ黎明期におり，内省を「不可欠のガイド」（Chafe 1992：234）として利用せざるを得ない。ここに方言を持ち込むと，多くの読者は内省が働かず，直感的に思い当たることができなくなってしまうおそれがある。この本が考察対象を基本的に共通語としたのは，この点を考慮してのことである。

第４節　手法

キャラ（クタ）をめぐる研究は始まったばかりで，「人間の中にはキャラ（クタ）というものがある。人間は対話相手次第で，キャラ（クタ）が変わる」ということを検証する方法論はいまだ確立されていない。それだけに，なるだけ多様なデータを呈示したいが，この本の性質上，手法を限定せざるを得ない。

前著では，実験科学的アプローチとして，Campbell and Mokhtari（2003）とモクタリ・キャンベル（2010）を紹介した【注 8】。このうち前者は，１人の日本語母語話者の数年にわたる膨大な日常発話コーパスを調べ，対話相手によって音声が有意に違う（たとえば娘相手だと概して高い声でしゃべっている。夫相手だと概して硬い声でしゃべっている）ということを見出したものである。また後者は，１人の日本語母語話者のさまざまな発話音声データ 30 個を実験参加者に与え，「これらの発話

音声を話し手別に分けよ」と指示したところ，実験参加者たちは疑いもせず，30 個の発話音声を複数グループに分け，さらには各グループの音声を発した具体的な話し手像を語ることができたというものである。これらのアプローチはいずれも興味深いものだが，この本の射程はもっと素朴で基礎的なところにあるため，実験科学的アプローチは採用しない。

また，対面式のインタビューやアンケートも有効な調査手法であるが，この本では採用しない。というのは，この本で中心的に扱おうとしているのは，たとえば「バイト先と学校でキャラが違う」というような，伝統的な静的人間観に反する人間の言動だからである。この伝統的な人間観は不当であるものの，依然として我々を縛っているというのが筆者の考えであり（先の第 1 節を参照），この考えによれば，我々は「変わってはいけない」というタブー（taboo，文化的禁忌）を破る言動を扱うことになるので，調査はきわめて慎重におこなわれなければならない。

たとえば，「バイト先と学校でキャラが違いますか？」と訊ねれば，相手は，本当は違っていても，自分のタブー違反を打ち明けたくないという思いから，ノーと回答することがあり得るだろう。

さらに警戒しなければならないのは，相手がイエスと答えた場合でも，この質問が，我々の本当に知りたい内容（「バイト先と学校で自分が思わず変わってしまっているということがあるのか？」という人間の変化の有無）から，タブーに抵触しない，別のもっと当たり障りの無い内容（「バイト先と学校それぞれでうまくやっていくために，バイト先で，あるいは学校で，あるいは両方で，演技して自分を取り繕うことがあるのか？」という演技・偽装の有無）にすり替えられている可能性があるということである。

いま「もっと当たり障りの無い内容」と記したが，この「演技」もまたタブー違反であるため，通常は秘匿されていると考えられる。これをインタビュー調査で明らかにすることも容易なことではない。社会学者・瀬沼文彰氏はインタビュー調査の結果，自らの「演技」を認めた回答者が 58 人中 10 人という少数にとどまったことを記しながらも，「演技」を認めたそれらの回答者が周囲の友人たちから「天然じゃねーのかよ。計算かよ！」「汚ねーな！」と否定的に反応されることを挙げて，「演技」を認めなかった回答者の中にも，周囲から気取られないよう演技している陰在的な演技者がいる可能性を示唆されている（瀬沼 2007：82-83）。我々の真の追究対象である人間の非意図的な変化は，まだその先に隠れている。

完全無欠の方法論などというものが存在しない以上，さまざまな調査手法の長所と短所を考慮した上で，それらを組み合わせて考えていかねばならないのは研究の常であり（定延 2016：第 2 章），瀬沼（2007）に代表される対面式のインタビューやアンケート調査による先行研究の知見が十分な尊重に値することは言うまでもない。瀬沼氏の最近の論考では，「演技」という用語に，意図的でないものも含める旨が明示されるようになっており（瀬沼 2018：155）【注 9】，筆者の研究との距離が小さくなっているだけに，こうしたインタビューやアンケート調査は熟達されている瀬沼氏におまかせし，この本では別の手法を試みたい。

この本の特に第 II 部で呈示されるデータの多くは，プロ作家による小説，随筆，マンガからの抜粋，そしてインターネット上の書き込みであり，先に挙げた谷崎潤一郎の『細雪』はその一例である。もちろん，それらの文章の中で，登場する人間たちがどのような思考や情感を抱き，どのような行動に出たかということは，書き手の恣意に委ねられており，何かの直接的な証拠にはならない。ここで問題にしたいのは，それらの作品の鑑賞者である我々が，登場人物のそのような思考情感や行動をそれなりに自然なものとして理解でき，違和感を持たずに先に読み進めることができるということである。インターネット上の書き込みは，程度の差はあれ匿名性が保証されるために，タブー違反の現象を観察する上で絶好の材料と言えるが，それだけに，書き込み手が申し立てどおりの

人物であるか否かは確かめられないという負の面も併せ持っている。たとえば，自称若者の，いかにも若者らしい告白が，実は老年層の暇にまかせた手すさびであるといった可能性は否定しきれない。だが，それらを見た我々が，若者の告白として違和感を持たずに受け取れるということは，特にそうした書き込みが１つではなく複数に及ぶ時には，我々の世界の何らかの実情がそこに反映されていると見てよいのではないだろうか【注 10】【注 11】。

取り上げられる創作物は，「現代日本語社会」（先の第３節を参照）を反映するよう，約半世紀～１世紀前に書かれ，現在も読み継がれている有名なものが中心となっている。これは，観察された現象の説明に，たとえば「21 世紀になって時代がこう変わったから」といった時代論を持ち込む必要性の有無を見極めるためでもある。人間に関わる現象で，時代が関係しないものは珍しいだろうが，もしも古い時代の中にも，今日の我々なら「キャラの変化」と呼ぶようなものが見られるなら，時代論を持ち込むことには，慎重な姿勢が求められることになるだろう。この考えは第 II 部に続いて第 III 部でも推進されることになる。

このほか，呈示されるデータの中には，筆者のプロジェクトのもと収録が進められている，一般人の語る「ちょっと面白い話」のビデオも含まれている。この本は紙媒体であるため全面的な呈示はできないが，「ちょっと面白い話」のビデオは誰でも自由に視聴・ダウンロード可能な形で公開してあるので，興味のある読者は閲覧していただきたい（http://www.speech-data.jp/chotto/history.html）。「ちょっと面白い話」の詳細は第４章第１節注 4，あるいは定延編（2018）・Sadanobu（2018）を参照されたい。

第５節　この本の構成

以降の部分は大きく４部に分かれる。

続く第 I 部は，第 II 部と第 III 部のための準備的な考察で，ここでは，さまざまな先行研究とそれらにおける「キャラ」「キャラクタ」概念が整理され，この本が中心的なテーマとする「キャラ（クタ）」の定義が紹介される。

その「キャラ（クタ）」の姿に光を当てるのが第 II 部と第 III 部である。第 II 部では現代日本語のコミュニケーションの中で，第 III 部では現代日本語共通語という言語の中で，「キャラ（クタ）」のあり方が論じられる。両者の間にはつながりが無いわけではなく，第 III 部は，我々が「キャラ（クタ）」を論じる際にどのような時代背景を認識すべきかという，第 II 部で取り上げられた問題意識の中で展開される。

以上の論は最後の第 IV 部でまとめられる。

【注】

１：第２節で述べるように，一部の先行研究は「キャラクタ」と「キャラ」を別義とするが，筆者自身は「キャラクタ」と「キャラ」を区別せず同義としている。つまり筆者の用語法では「キャラ」は「キャラクタ」の略語に過ぎない。以下，この本では差し障りの無い範囲で「キャラ」で通すが，少しでも誤解が生じるおそれがあると判断された箇所では「キャラクタ」も含めて一括し，「キャラ（クタ）」と表記する。

２：ここで言う「日本語社会」とは，定延（2011）のタイトルにも含めたもので，日本国の国土上であってもなくても（たとえば国際線の飛行機の機上でも），日本語話者たちが日本語で会話し始めるとそこに開ける社会を指している。この本では，「日本」と言うよりふさわしいと思われる箇所では，この語を用いるが，両語の使い分け基準は厳密なものではない。

３：このことに気付かせてくれた細馬宏通氏に感謝したい。

４：ここで「外来者」という語を括っている二重山括弧《 》の意味は，２段落後の箇所で簡単に説明する（さらなる詳細は第１章第 3.2 節注 25 前後を参照）。なお，

ここで《外来者》としているものは，定延（2011）で《異人》と呼んだものと等しい。改称の理由は誤解の防止にある。キャラの研究では，我々の偏見や差別意識を俎上に載せねばならないことが時にある。その場合，「差別的な響きを持つ日常語（たとえば「異人」）を，差別的なニュアンス無しに専門語（《異人》）として採用する」という方法は誤解を生むおそれがあると考え，この本では，差別的な響きがより少ないと思える別語（《外来者》）を採用する。同時に，定延（2011）の《私たち》を《在来者》と呼び換える。《在来》《外来》の区別については第7章第3節で後述する。

5：《地方人》が《外来者》タイプに属しているのは，ここでの観察対象が基本的に，東京方言を中心に出来上がった現代日本語共通語だからにほかならない。仮に観察対象を共通語から大阪方言に移せば，《大阪人》キャラは《外来者》のグループから抜けて《在来者》になり，代わって《外来者》のグループに《東京人》が含まれることになる。

6：ことばが単なるメディアではないということは，別の形でも論じることができる（第2章第3.3節）。

7：相良夫人に対する蒔岡幸子の「反発」は，ベイトソンの「対称型の分化」の兆しと位置づけることができる。対称型の分化では，お互いがお互いを駆り立て，ますます強い行動をとっていく結果，関係が決裂する（ベイトソン 1972：訳125）。

8：Campbell and Mokhtari（2003）は，声質（せいしつ，ここでは声の硬さ～軟らかさ）という音声特徴が声の高さとは独立の音声特徴であることを示したものであり，キャラ（クタ）論を明示的に展開するものではない。だが，これをキャラ（クタ）論として理解することは十分に可能である。前著ではこの点を第1著者に確認の上，紹介した次第である。

9：但し，瀬沼氏と違って，この本では「演技」という用語には非意図的なものを含めない。この措置は，意図性の有無はしばしば，人間が無視できない重大な違いだという筆者の判断に基づいている。意図的な自己偽装は，それが発覚すれば，いま紹介した瀬沼氏の調査のように「天然じゃねーのかよ。計算かよ！」「汚ねーな！」と強く非難されがちである。こうした非難や告発は，最近新しく生じたものではない。たとえば，太宰治の小説『人間失格』（1948）には，鉄棒の練習中にわざと失敗して皆の笑いを買い，《ひょうきん者》（お道化）を演じていた主人公が，背後から一人の級友に「ワザ。ワザ」と低い声でささやかれるという場面がある。他方，或る人物の非意図的な変化が白日のもとにさらされた場合，我々は当人を責めるよりはむしろ，気まずい，いたたまれないきもちになるのではないか。両者の違いは，第2章第2節の「コウモリ」と「火星人」の違いでもある。筆者の「キャラクタ」の定義（第1章第3.1節（1.32））は，このような気まずいきもちと結びついている。

10：このような，「インターネットへの書き込み手が実際どのような人物か」ということよりも，「その書き込みがどのような人物によるものとして受け入れられるか」を重視する姿勢は，そもそも文化というものが，当該社会の構成員全員が漏れなく共有しているものというよりも，当該社会の多くの構成員が「当該社会の多くの構成員が共有している」と思うものであるなら（cf. Enfield 2002: 16-17），許されるのではないか。

11：インターネット上の書き込みには，空白行がふんだんに設定されているものがある。この本では，書き込みを引用する際には，文意に支障が無いことを確認した上で，スペース節約のために，空白行を省いて引用していることを断っておく。また，インターネット上の書き込みは，更新・削除の可能性が常にある。この本では，書き込みを引用する際には末尾にURLに加えて最終的な確認日を記してある。最終的な確認日を記していない引用は全て，2020年3月8日が最終確認日である。なお，これはインターネット上の書き込みに限った話ではないが，引用される原典の中には，段落の冒頭であっても1字下げしていないものがある。この本では，原典の1字下げの有無を忠実に反映している。この本が，例の冒頭で1字下げがあったり無かったり，統一がとれていないように見えるのはそのためである。